

「台湾最新コンビニスイーツ事情」

歐 元韻

今年の春はコロナ対策が大幅に緩和され、ビジネスや観光目的で多くの台湾人が日本を訪れています。最近では、私の知り合いからも「日本に行ってきた」との話をよく耳にします。私の場合、以前より日本に行った際の楽しみの一つが、日本のコンビニ巡りです。お目当ては多くの台湾女子同様、コンビニデザート、スイーツ買いです。日本のコンビニスイーツの充実ぶりは、台湾人の間でも有名です。要チェック商品を見つけるワクワク感は万国共通の楽しみです。しかし近年では、台湾のコンビニ業界でもデザート、スイーツ類のレベルが一段とアップしています。今回のレポートでは、こうした台湾企業の取り組みを中心にをご紹介します。

<台湾コンビニ市場>

2019 年末時点で台湾政府公平交易委員会が行った調査結果によると、当時、既に台湾のコンビニ密集度は日本を追い抜き、トップの韓国に次いで世界第2位となりました。台北市では、1平方キロメートルの範囲内に6店舗強ものコンビニが軒を並べた状態です。現在では、その密集度も更に密になっている可能性が十分推測されます。当時の調査では、5大コンビニブランドの総店舗数は計 11,429 店でした。その後 2022 年 3 月時点での集計では、4大コンビニ企業だけでも店舗数は、台湾セブン-イレブン 6,502 店、台湾ファミリーマート 4,024 店、ハイライフ 1,544 店、OK マート 767 店となっており、その他にも台湾タバコ・リッカーコーポレーション、義美食品、大手ネットショッピングサイト Shopee 社等でも、食品類中心のコンビニエンスストアを多店舗展開していることから、市場的には既に飽和状態で、その成長にも限りがあるとの見方が少なくない状況です。

<台湾2大コンビニスイーツ>

台湾コンビニ業界を代表する2大勢力といえば、台湾セブン-イレブンと台湾ファミリーマートです。業界での先発組である台湾セブン-イレブンでは、デザートやスイーツ類についても他社に先駆け、大手外食企業、高級スイーツ専門店、五つ星ホテルや航空会社、大手食材商社等といった有名企業とのコラボ商品を次々と開発、製品化しています。今年はタロイモペーストプリン(約 260 円)、リージェントホテル生クリームロールケーキ(約 350 円/1 カット)など、高級感あふれたものが目につきます。さらに、有名専門店のデザート、スイーツ類のカタログ販売(予約制)にも力を注いでいます。

一方の台湾ファミリーマートでは、この春新たなコンビニスイーツブランド「minimore」を立ち上げました。台湾経済部の調査結果によると、台湾のデザート市場は1年間で 150 億台湾元(約 658 億円)以上の市場規模に達しており、約7割近いサラリーマンやOLが、午後の休憩時間にドリンク及びデザート類を飲食することで気分転換を図っているとの消費行動が明らかになり、そこから新規事業「minimore」が生まれました。台湾消費者に人気のある生クリーム入りシュークリーム、レモンタルト、千層ケーキといったスター商品を中心に日本の専門技術を取り入れ、国民的スイーツを創り出すとの企業方針も話題となっています。フランス風千層ケーキ(約 210 円/1 カット)、抹茶千層ケーキ(約 228 円/1 カット)、フランス風レモンタルト(約 184 円/1 個)といった本格的な商品から地元有名ブランドとのコラボ商品まで、多品種に渡っての商品展開を図っています。

<スーパーマーケットスイーツ>

台湾でコンビニスイーツをしのぐほどの存在感を示しているのが、業界最大手のスーパーマーケット、全聯福利中心(2022 年 12 月 1 日時点での店舗数 1,124 店)が手掛けているデザート、スイーツブランド「ウィ・スイーツ」です。全聯スーパーでは家族向けにも対応できるよう、各商品は2個から4個単位包装、ケーキ類は2ピースからホール単位にて各種販売がされています。過去にはシュークリームで有名なピアードパパ・ブランドとのコラボ商品で、高級クリームパンなどを販売しました。また、台湾で抹茶の甘味処として有名な日系企業とのコラボ商品も話題となりました。期間限定商品も含め、ティラミス、モンブラン、ショートケーキ、バイクドチーズケーキ、和菓子では大福やわらび餅も手掛けるなど、その商品群でもコンビニ企業を上回っています。

近い将来、台湾のコンビニ、スーパーでも広島スイーツが登場してくれることを願っています。



【多種多様な台湾コンビニスイーツ】